神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	柳田國男と神奈川の民俗学研究Ⅰ ―郷土会の相州内郷村調査を中心に―
著者	鈴木通大
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 17 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1991 年（平成 3 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

柳田國男と神奈川の民俗学研究Ⅰ
―郷土会の相州内郷村調査を中心に―

鈴木通大

本論は、神奈川県における民俗学研究の軌跡について俯瞰することを目的とし、とくに日本民俗学の創始者である柳田國男が神奈川県の民俗研究へ及ぼした影響力に視点を照射したかった。そこで、郷土会の内郷村調査を中心に取り上げることを試みた。

近年、松本三喜夫は柳田たちが内郷村で実施した農村調査の実態がどうであったか、その目的は何か、さらに村民の側における協力者や村民の反応がどうであったかなどという点に視座を据えた論考[1]を発表しているので、その成果を踏まえて考察することにした。

なお、紙幅の制約上、柳田國男を基軸とした日本民俗学史は、表-Ⅰにまとめてあるので参照してほしい。

柳田國男と郷土会の津久井郡内郷村調査

日本民俗学にとって、民俗調査 Field Work の嚆矢ともいえる津久井郡内郷村の総合調査が新渡戸稲造、柳田國男らの郷土会の手によって実施されたのは大正七年（一九一八）のことである。

この郷土会は、明治四三年（一九一〇）一二月四日に新渡戸稲造氏宅で始まった会であるが、誕生するにあたっては柳田國男が明治四〇年から四一年頃、自宅で始めていた郷土研究会があり、一方、新渡戸がすでに主宰していたところの会合があったという土壌がすでに横たわっていた。そこで、二つの会が合体して発足した会ともいわれるが、このことについてはあまり知られていない。このあたりの事情は柳田の回想でうかがうことができる。

「郷土會」のもとになつたのが「郷土研究會」といふ集りで、明治四十年か四十一年ごろ、私の家で始めたものである。そこへ新渡戸博士が西洋から歸つて來られたので、後には新渡戸先生のお宅に伺ふやうになつたが、中心はやはり「郷土研究會」からの連中であつた。話題のもとは會員各自の旅行の報告で、いちばん熱心だつたのは早稲田大學の小田内通敏君であつた。小田内君を私に紹介したのは、やはり早稲田の人で、國木田獨歩の友人とかきいてゐた。ことによると牧口君が連れて來たのかも知れない。小田内君の關係で一人、二人會員になつた人があつたが、とにかくさふいふ人が全部新渡戸先生の方へ移つたのである〔柳田　一九七一　一八七～一八八〕。

これからもわかるように柳田の記憶があまり定かではないが、前述したような大筋を理解することができよう。ここに登場した郷土研究会というのは、当初、出張などから帰った柳田が妻や義姉矢田部順の一家を集めて旅先の話を聞かせたのが発端になって、いつの

表—I　柳田國男と日本民俗学の軌跡

年度	年譜	主要著書	関係学会動向	社会
明治八(一八七五)	・兵庫県神東郡田原村辻川で生まれる			
一九			・『東京人類学雑誌』	・大日本帝国憲法公布
二三			・『風俗画報』創刊、『しがらみ草紙』	
二三	・再上京、兄井上通泰宅に同居（明治二〇年上京）			・日清戦争
二七			・考古学会設立	
二八				
二九	・両親死去			
三〇	・第一高等学校卒業			
三一			・言語学会	
三三			・日本歴史地理学会	
三三	・東京帝国大学卒業、農商省農務局に勤務			・日露戦争
三四	・柳田家の養嗣子として入籍			
三七	・結婚。内閣文庫でよく読書			
四一	・兼任宮内書記官			
四二		・『後狩詞記』		
四三	・郷土会を創立。南方熊楠を識る	・『石神問答』、『遠野物語』	・伊波普猷『古琉球』	
四四			・日本民俗学会『民俗』	・明治天皇崩御
四五				
大正二(一九一三)	・兼任法制局書記官。高木敏雄と共に『郷土研究』創刊	・「巫女考」	・高木敏雄『日本伝説集』	
三	・貴族院書記官長	・「毛坊主考」、『山島民譚集』		
四				・第一次大戦始まる
七	・神奈川県津久井郡内郷村の調査			・大正天皇即位式
八	・貴族院書記官長辞任		・『土俗と伝説』	
九	・朝日新聞社客員。沖縄の旅	・『赤子塚の話』	・『民族と歴史』	・ベルサイユ条約

年度	年譜	主要著書	関係学会動向	社会
一〇	・国際連盟委任統治委員として欧州に滞在		・アチック・ミューゼアム設立	
一一		・『郷土誌論』、『祭礼と世間』	・『灯辺叢書』刊行	
一三	・『民族』創刊。南島談話会	・『海南小記』	・北方文明研究会	
一四		・『山の人生』、「人を神に祀る風習」		・関東大震災
一五	・吉右衛門会発会			
昭和二(一九二七)	・北多摩郡砧村転居	・『蝸牛考』	・C・C・Burne（岡正雄訳）『民俗学概論』	
三	・方言研究会が成立	・『雪国の春』、『青年と学問』	・『民俗芸術』、『旅と伝説』	
四		・「葬制の沿革について」、「聟入考」	・民俗学会『民俗学』	・世界恐慌始まる
五	・朝日新聞社論説委員辞任	・『民間伝承論大意』	・『郷土』	
六		・『明治大正史世相篇』	・『郷土研究』再刊、『方言』	
七	・「郷土生活の研究法」の会	・『日本の伝説』	・『ドルメン』、『俚俗と伝説』	・国際連盟脱退
八	・『島』を編集発行。毎週木曜日〔民間伝承論〕の講義をする。（→昭和9年第一回木曜会へと発展）	・『桃太郎の誕生』		
九	・全国山村調査始まる。	・『日本の昔話』、『一目小僧その他』	・日本民族学会『民族学研究』	
一〇(一九三五)	・日本民俗学講習会。「民間伝承の会」創設。『民間伝承』発刊、『昔話研究』刊	・『郷土生活の研究法』、『産育習俗語彙』	・『ひだびと』	
一一	・全国の昔話採集		・『近畿民俗』	
一三	・丸の内ビルで日本民俗学講座。全国海村調査始まる。			

年度	年譜	主要著書	関係学会動向	社会
一三 一四		・『昔話と文学』 ・『木綿以前の事』、『国語の将来』		
一五 一六 一七	・日本方言学会創立 ・朝日文化賞受賞	・『食物と心臓』、『妹の力』 ・『こども風土記』、『日本の祭』		・太平洋戦争
一八 一九		・『神道と民俗学』 ・『国史と民俗学』、『火の昔』		
二〇(一九四五) 二一		・『笑いの本願』、『先祖の話』、『祭日考』(新国学談三部作『山宮考』『氏神と氏子』)	・『日本民俗学のために』(柳田古稀記念論文集)	・ポツダム宣言
二三 二四	・民俗学研究所 ・民間伝承の会を(日本民俗学会)と改称(第一回年会)	・『北小浦民俗誌』	・『民俗学研究』 ・『民俗学辞典』	・朝鮮戦争
二五 二六	・全国離島村落の調査研究始まる ・文化勲章受賞。にひなめ研究会始まる			
二七 二八 二九 三〇	・第一回稲作史研究会 ・民俗学研究所解散		・『日本民俗学』 ・『日本民俗学会報』(→『日本民俗学』)、『日本民俗学大系』	・TV普及
三一 三二 三三		・『海上の道』 ・『定本柳田國男集』刊行開始		
三四 三五 三六 三七	・死去			

参考文献:鎌田久子「柳田國男の年譜」(「定本柳田國男集」別巻6)

間にか、このような会に発展していたらしい。[2] そこには、新渡戸のところへも顔を出していた小田内通敏や牧口常三郎らも常連となっていたので、おそらく柳田の会と新渡戸の会が合体して郷土会になることにはたいした碍害も見あたらなかったようにおもわれる。いずれにしても、このあたりの問題については、まだまだ解明の余地が残っているといえよう。

さて、この郷土会には新渡戸と柳田をはじめとして、小田内通敏、小田島省三、十時　弥、木村修三、石黒忠篤、小野武夫、正木助次郎の諸氏が主な出席者であったが、この他にもあらゆる方面からの参加者があったことも知られている。しかし、どちらかといえば、民俗学や人類学に直接関係ない人びとが多かったといえよう。

それだからといって必ずしも肯定はできないが、例会は全く自由な談話会であり、サロン風であったらしい。その光景は、柳田國男が編集した『郷土会記録』（一九二五　大岡山書店）に所収されている郷土会記事からもうかがうことができる。しかし、活動内容を概観すると、村落生活の見聞を報告する以外にも、埼玉県の武蔵野新開地、神奈川県の秦野、同内郷村などで見学会や共同調査を行っており、それなりの成果をあげていたといえよう。こうした郷土会は、新渡戸稲造が第一次世界大戦の終わり頃、欧州視察へ出発するまで続けられた。余談になるが、ここで中絶した郷土会は、大藤〔一九九〇　一〇五〕が柳田から聞いた話によると、小田内通敏を中心として一時復活したらしいというが、その実態について詳しいことはほとんど何も知られていないのが現状である。

○

内郷村の調査は、初めての計画的・共同的・本格的な村落（農村）調査かつ民俗調査であった。したがって、この出来事は日本の民俗学にとっては、もちろんのこと、神奈川県における民俗学にとっても輝かしい足跡の第一歩であったにも拘らず、その結果については、柳田國男にとって決して満足できるものではなかった。柳田は、その年の九月八日、三越で開催された流行会例会の席上で講演し、この調査について批判的な感想を述べている。この講演は「相州内郷村の話」としてまとめられているが、その中で、柳田は次のように語っている。

同行の諸君の意見は未だちつとも承はつて居りませぬが、私だけの實驗は、一言を以て申せば村落調査と云ふものは、非常に面白いと同時に、非常に六つかしい仕事だと云ふ、是だけであります。〔柳田　一九七〇　三三〕

ここでわかるように、柳田はにべもなく端的に感想を語っている。しかも、「村を觀んとする人の爲に」（『郷土誌論』）の中ではより具体的に忌憚のない感想を述べている。

非常に面白かつたけれども、我々の内郷村行きは學問上先づ失敗でありました。面白かつたとは言ひ得ますが、有益であつたとは申しにくい。其失敗の原因は至つて單純で、勿論我々の怠惰不

熱心の爲ではない。一言を以て言へば、問題が多岐に失して順序と統一の無かつたこと、學び得る事は何でも學ぼうとした其態度が悪かつたのです。此態度と雖、其に必要なる時と資力さへ具へて居たならば、絶對に悪いものでは無い〔柳田　一九七〇　四一〕

柳田は、この調査は面白かったが「学問上の失敗」であると指摘し、その理由として、統一テーマの欠如、問題意識が明確でなかったこと、時間の欠如、資金面の欠如などを挙げている。柳田が当初から力を入れていた共同調査であったにも拘らず、統一テーマの欠如や問題意識が明確でなかったことから失敗したと主張していることは、おそらく先に指摘したような郷土会の体質にもひとつの原因があったようにおもわれる。そのことについては、大藤の発言がいみじくも裏付けている。

郷土会は先生の考えは一定の問題を中心としたい希望であったが、新渡戸博士は「心ある旅行者の会」とも名づくべき、むしろ問題の中心点のないのを喜ばれたようであった〔大藤　一九九〇　一〇五〕。

柳田は、郷土会がたんに好事家の集まりだけで終らず、むしろ研究者の集まりとして一定のテーマを設けて共同研究する方向を打ち出すことを期待していたらしい。したがって、内郷村調査はその目的を達成するための新しい試みになるはずであったが、残念ながらその結果は柳田の期待からみれば程遠いものになってしまったらしい。また、話が前後してしまうが、松本が言及している点も無視できないことである。

また調査期間中「食事と葱と南瓜の一週間」ということで、新聞記事になり村人より叱られたということから考えると、柳田らは必ずしも村民の間にうちとけて、調査が実施できたという状況ではなかったのではなかろうか。その原因が柳田らの口髭にあり、食事のことにあるとしたら、およそ調査以前のところに問題があり、調査としては極めて初歩的なミスであったといわねばならない〔松本　一九九〇　九〕。

ここで、松本は失敗の理由のひとつとして本質部分を鋭く指摘している。たしかに、松本が指摘している理由は柳田らが声を大にして主張できなかった事柄であるとおもわれる。いずれにしても、柳田はこの時の反省を踏まえてか、当分の間、このような共同調査を行わず、ひたすら日本民俗学の確立をめざしたようである。やがて、彼によって確立された日本民俗学がもはや歴史的な遺産となった「山村調査」「海村調査」「離島調査」を経て、ようやく、いわゆる学際的研究を意図した共同調査へ参画するのは、昭和二五年（一九五〇）、渋沢敬三が主宰した八学会連合の対馬調査であった[3]。とはいえ、この内郷村で初めての共同調査が試みられたからこそ、日本民俗学にとって画期的な「山村調査」へと結び付いていったのでは

なかろうか。

○

では、一体、内郷村調査はどのように進められたのだろうか。それは遠足旅行と称していた武蔵野新開地や秦野地方の調査とはちがい、かなり綿密な調査計画を立てている。

調査地 Field の設定については、その間の事情を小田内通敏がその著『聚落と地理』の中で次のように回想している。

其の間に原町田や野火止に研究的遠足を試みた位のもので、一定の目的で纏つた時日を村の調査に費した事がまだ一回もなかつた。間のある度毎に「組織立つた綱目で何處かの村を調べて見やうではないか」という話がよく出、それには綱目が必要だといふので先づ組立に数ケ月を費した。綱目がいよいよ出来上がつてさて何處の村がよからうかといふ事になつたが、東京からあまり遠くない地形上村境の纏つた、そして村人に調査の趣味を持つてる方々のゐる處、といふ条件に當嵌る處をさがす事は中々困難であつた。幸にも神奈川縣津久井郡内郷村は、以上の条件によく適つてるといふ柳田君の發案で、愈々村調査の第一回を行ふ事になつた。〔小田内　一九二七　一四三～一四四〕

すなわち、柳田の発案[4]によって、選ばれた調査地の内郷村は、東京に近いなどの条件に適合していた。しかし、柳田は、最初、津久井郡佐野川村を調査の候補地として考え、予備調査も試みたらしいが、最終的にはこの内郷村に決めた。この内郷村を選んだ理由には、次のような条件があった。

全體最初に内郷村を選定しましたのは、一つは地形、即ち一方の境は高い嶺、他の三方は絶壁を以て川に臨み、近年まで橋も無かつたと云ふ孤存状態と、第二には村長校長其他の有力者に、同情と理解が有つたのが主たる誘因で、實は此程迄に文書類のよく保存せられて居る村とは知らずに出掛けたのです〔柳田　一九七〇　三四〕。

とくに、ここには後にみられるような調査地に対する柳田の基本的な考え方が表出しているといえるだろう。このことは、松本〔一九九〇　五～六〕も指摘しているように、古い習俗は辺境の地に残存しているという観点から自然の要害に囲まれた辺鄙な地域、すなわち山村、海村、離島という地域を民俗調査の候補地として選定していくという視点が、この時期に芽生えはじめたことである。

さて、内郷村というのは、神奈川県の北部に位置し、村の北側には相模川が流れ、東側には道志川が流れている地域で、南側も石老山を中心とした山塊によって隔絶されている地域である。当時の内郷村の様子を鈴木重光は次のように紹介している。

この内郷村は神奈川県相州の北端なる、津久井郡の中部に在って、戸数わずかに三百八十余、人口二千四百五十余の一寒村ある

が、若柳・寸沢嵐の二大字、若柳・奥畑・阿津・山口・鼠坂・寸沢嵐・沼本・道志・増原・関口の十部落から成っている〔鈴木一九七五　七〕。

この内郷村は、昭和三〇年（一九五五）に与瀬町、小原町、千木良村と合併して相模湖町となり、今日に至っている。道路や建物等が新しく変わっているが、その景観には当時を偲ばせるものがある。

○

調査項目は、小野武夫の『農村研究講話』の中に掲載されているので、ある程度のことがうかがうことができる。小野〔一九二六二五～二九〕によると、郷土会の会員であった柳田、石黒、小田内、牧口、那須　皓、木村、正木の諸氏が期日を定めて調査項目を提出し、それを那須、小田内、小野の三氏が委員として整理したとある。その結果として、全体を沿革及び住民、風土、土地、交通、農業及び其他の生業、衣食住、社会生活、衛生、教化、信仰、俗伝という一一項目に分類している。とりわけ農業経済方面が多いが、今日でいう民俗の項目もかなり取り上げられている。すなわち、社会生活では村の組織、若衆団体、講中、娯楽、休日、童戯、冠婚葬祭の慣習、そして俗伝では農に関する儀式、禁忌、禁厭、俚謡、俗諺、伝説を取り上げている。　この点は、おそらく柳田の意向が強く反映していたのであろう。ところで、この調査項目が、昭和二八年に刊行された『津久井郡勢誌』の目次構成[5]に酷似していることから、おそらく編集にあたってこれを応用したのであろう。

次に、これらの調査の分担はどうなっていたのだろうか。それについては、小田内通敏の「内郷村踏査記」の中で次のように書かれているので、おおよその内容をうかがうことができる。

調査を行うについては、沿革は柳田国男君、天然と土地とは草野俊助正木助次郎両君、農業其の他は石黒忠篤小平権一両君、衣食住は自分、社会生活は小野武夫君、教化及衛生生活は牧口常三郎中桐確太郎両君、俗伝は中山太郎君、蚕室は田中信良君ときまった。外に白茅会の佐藤功一今和次郎両君は専門の建築方面を分担助力する事になった。〔小田内　一九二七　一四四〕

ところが、実際には小野武夫や中山太郎らは不参加であったので、この調査は当初の計画通りに実施されなかったが、そのメンバーをみる限りにおいては豪華な顔ぶれである。その結果については、一応、前述した通りであるが、その一方で、現地の参加者であった鈴木重光は、この調査から影響を受け、しかも柳田の指導によって「爐邊叢書」の一冊として『相州内郷村話』を刊行したり、今和次郎も民家の分野で活躍するなど、調査の成果があがっている。鈴木の成果には、柳田國男をはじめとして日本民俗学界の中で多大な評価が与えられていることは周知のことである。そのことは、次のような意見で代弁されているといえるだろう。

しかしここには村の変貌という視点はとられていない。むしろ、

より古い記録を「今のうちに集録して置かなくては思い立って」（『相州内郷村話』二頁）、鈴木重光がまとめたものである。この視点はまた柳田国男の意図するところであったと思われる。

「郷土研究に総論が必要になって来た」と柳田は記しているが、農村生活誌が郷土単位で構成され、そこから日本人全体の国民生活誌、民俗生活誌の体系化をはかろうとする意図であり、それは内郷村の村落調査の段階に芽生えていたのである〔宮田　一九九〇　二二～二三〕。

それに引き換えて、今和次郎の成果は等閑視されてきたきらいがある。ここで、今を取り上げて、彼の成果を概観してみよう。

今和次郎は、その著『日本の民家』の中で「大正七年の夏、『郷土会』にて研究旅行せる際の住居に関する報告である」として相模国津久井郡内郷村（現相模湖町）の民家について報告している。すなわち、今は「白茅会」のメンバーとして、「郷土会」と合同してこの地を訪れ、民家の調査を行い、その成果を発表している。

ところで、前述したように日本民俗学界では、この内郷村調査における成果としては鈴木重光の『相州内郷村話』を認知しているが、それと比較して今の成果に対してはあまり正当な評価を与えていないようにおもわれる。たしかに、今の成果は民家の部門だけというハンディキャップがあったとしても、当時、調査研究の成果としてはおそらく画期的なものではなかったかとおもわれる。しかも、今が考現学への道に進まなかったら、その評価は一体どうなっていたのだろうかと考えると、興味を抱かせる問題である。

今が所属していた白茅会というのは、柳田國男、佐藤功一を発起人にして、石黒忠篤、細川護立、大熊喜邦、田村鎮、内田魯庵、木子幸三郎、それに今を加えた九名によって構成された民家の研究会で、その目的は民家を調査研究することであった。会の名称は、民家を草葺き屋根に使われる茅が風化して白くなるのにちなんで命名されたという。この白茅会はわが国において民家の研究を組織的に行う研究会の嚆矢であった。

○

さて、話の筋を元に戻してみよう。柳田國男の発案によって、内郷村が調査地に決まったが、柳田が人脈のある内郷村に内定するまでの過程については松本〔一九九〇　六～八〕の前掲論文に詳しいのでここでは省略する。調査地が決まると柳田は、早速、長谷川一郎に次のような内容の書簡を送り、現地の協力体制を照会している。

一、人数は十人内外、中には二三日にて往返するもあれど、多くは引つゞき滞在致候。

一、原則として、村より金銭は勿論のこと勤労の援助なども受けぬこと。

一、野営もいとはざる大決心なれども、どこか宿舎を貸与（有料）せらるゝ向は有之まじきや。

一、分宿も結構なれども、炎暑の頃なれば寺か何か涼しい処が借りられて、夜分静かに休養が出来るならば、一同大悦なる

べきこと。
一、寝具食料の如きも、中々御地にてとゝのはぬものは全部持参差支へなきに付、予め限度御見込をしめされたきこと。
一、但、小生始め何れも如何なる不自由にも耐へ得る筈。
一、食事世話人二人雇度希望。
一、旧新の文書類は、出来るだけ多く披見を許され度こと。
一、遠慮をせず且つほらを吹かぬ若干の村老たちへ御紹介を乞度こと。
一、青年諸君とも会談は大いに望むも、少し時間に不安を感ずる際なれば、一切の集会類はお見合せを乞ふこと。
一、酒類は絶縁のつもりに候こと。
一、知事公には先日手紙の序に一寸申入れたるも、いよいよの節は貴下より郡長にお話被下度事。
一、而も新聞屋には出来るだけおそく迄知らせぬこと。
一、来週位には此方より小野君又は小生参るべきに付、御多用中決してそちらよりお出かけ被下みじきこと。

〔長谷川　一九五六　四〕

以上の諸点は、今日の民俗調査の心得にも相通じることである。こうした条件に応えるように、長谷川一郎らは肝腎要となる宿泊施設として阿津にある正覚寺を用意した。調査参加者は、長谷川〔一九六一　二～四〕によると、柳田國男、石黒忠篤（後の法相）、田中信良（鉄道員参事）、草野俊助（理学博士・東京大学教授）、中村留二（農林技師）、中桐確太郎（早稲田大学教授）、小田内通敏（早稲田大学講師）、小野武夫（農学博士）、佐藤功一（工学博士・早稲田大学教授）、今和次郎（早稲田大学教授）、正木助次郎（中学校教諭）、牧口常三郎（小学校長）の一二名で、参加予定で参加できなかった者は新渡戸稲造、三宅驥一（理学博士）、小平権一（農林事務官）、中山太郎、田村　鎮、大熊喜邦の六名となっている。全員の参加が不可能であったのは、とりもなおさず職務の都合などで時間がとれなかったのが、大きな理由であったらしい。この点に関しては、小田内通敏も、次のように言及している。

所が八月十五日からいよいよ踏査するといふ間際になつて、分担者に種々の故障の起つたのは、何れも多忙の職務を持ちながら、十日もこの事に費すといふ無理算段の已むを得ぬ事である。兎に角八月十五日踏査に上った一行は柳田・草野・正木・牧口・中桐・佐藤・今・田中君と自分であった。〔小田内、一九二七　一四四～一四五〕

ここでも、仕事の関係で時間がとれないので、調査に参加ができなかった者が少なくなかったことを証左している。

また、興味深いことは、調査参加者について各人が若干の混乱をきたしていることである。すでに、長谷川と小田内との間にも参加者の顔ぶれに若干の違いがみられる。さらに調査に参加できなかった小野武夫〔一九二六　二五～二九〕によれば、参加者は柳田國男、

新渡戸稲造、石黒忠篤、木村修三、那須　皓、小田内通敏、正木助次郎、牧口常三郎、中桐確太郎、小此木忠七郎の一〇名とあり、なおさら困惑してしまう。とにかく、未曾有な共同調査は始まり、協力者である鈴木重光、長谷川一郎、長谷川薫一（長谷川一郎の弟）の三氏は案内役を務め、同時に話相手にもなった。鈴木重光とともに共同調査の受け入れに活躍した長谷川一郎は後になって、当時の様子を次のように回想している。

先生方は頗る熱心なもので、村の中央にある正覚寺に宿所を設け、文字通り朝は露を踏み夕は星を戴くまで、村の小道や小川まで尋ねて、お宝でも探すように石塊一つも見落とすまいという熱心さに、村人は感激して居りました。そして夜は毎晩十二時すぎまで昼間の調査による議論の花を咲かせるというような有様でした。特に農民の生活状態を調査し旧家の古文書によって内郷村の昔を研究しました〔長谷川　一九六一　三〕

このことから柳田たちの一行が、きわめて熱心に村内を歩き回り調査を試み、宿泊所の正覚寺に戻ってからは夜遅くまでミーティングを行っている様子がうかがえる。この辺については、松本三喜夫が正覚寺前住職から聞き書きした中にも描写されている。[6]

では、ここまでにも内郷村調査についてはいろいろと論及してきたが、最後に松本が、この調査について、どのような評価を下しているのだろうか。

柳田にとって、町村是に代わる新しい農村調査方法の確立が、内郷村農村調査の実施の目的であり、それに郷土研究という面から考えれば、当然のことながら体系的、不変的でなければならなかった。したがって、柳田ののべる一過性の記録や偶然性の記録、さらにはそれらの事象は排除されねばならなかったのであろう。柳田は内郷村の調査について、「学問上」失敗であるとした。「学問」的であろうとするがために、現実の農村問題が果して本質的なものか、単に事象的なものかあいまいのうちに、現実に踏み込めずに終わったのではなかろうか。内郷村農村調査は、生活の変遷を見通した、変革をめざした現実への働きかけではあったが、柳田が農政官僚として産業組合にうち込んだ時代の現状への働きかけ、現状分析という点では著しく後退していたといえる。このことが「歴史拒否」や「変革ぬき」と評されることにつながり、そういう姿勢が、その後確立されていく「民俗学」にも反映していくことになる。〔松本　一九九〇　一七～一八〕

この指摘が正鵠を射てるかどうかは別として、いずれにしても柳田國男が志向した民俗学の確立は昭和一〇年に明治神宮外苑の日本青年館において日本民俗学講習会が開かれるまで待たねばならなかった。その間の事情をさらに検討する必要性があると思われるが、ここでは次の課題としておきたい。

ここまで、内郷村調査に関して大きく紙面を割いてきたのは、柳

表—Ⅱ　日本民俗学と郷土神奈川

	日本民俗学史	神奈川県の民俗学研究
天明八（一七八三）	○菅江真澄『真澄遊覧記』〔東北各地を四〇余年巡遊〕	
寛政五（一七九三）	○本居宣長『玉勝間』〔享和一（一八〇一）〕	
文化一三、四（一八一六）	○屋代弘賢『諸国風俗問状』	
文政一一（一八二八）		○『新編武蔵国風土記稿』
天保一（一八三〇）	○喜多村信節『嬉遊笑覧』	
天保二三（一八四一）		○『新編相模国風土記稿』
明治八	○柳田國男生まれる	
一九	○坪井正五郎ら、「東京人類学会」創設、『東京人類学雑誌』	
二〇—三〇	○鳥居龍蔵ら、「土俗会」で各地の報告	
四二	○柳田「後狩詞記」（定本二七）	
四三（一九一〇）	●新渡戸稲造・柳田國男ら、「郷土会」創立。柳田『遠野物語』および『石神問答』（定本四）（定本三）	
大正二	○柳田・高木敏雄、雑誌『郷土研究』創刊	
六	○『郷土研究』四巻二号で休刊	
七（一九一八）	○折口信夫、雑誌『土俗と伝説』を創刊	
一三	○雑誌『民族』創刊（昭和四年休刊）。アチック・ミューゼアムで民具蒐集	●郷土会、神奈川県津久井郡内内郷村（現・相模湖町）調査
一四		○鈴木重光、『相州内郷村話』を刊行
昭和三	○雑誌『旅と伝説』創刊	
四	○折口・金田一京助・早川孝太郎・宇野円空・松本信広ら、「民族学会」組織	○この頃、「横浜民間伝承の会」ができる
八	○柳田・比嘉春潮、雑誌『島』創刊	
九	○柳田、第一回「木曜会」開催、『民間伝承論』。	○倉田一郎、津久井郡青根村を調査（山村調査）
	●全国山村調査開始（三年継続）	
一〇（一九三五）	●「民間伝承の会」	
	○雑誌『民間伝承』創刊	
	○柳田、『郷土生活の研究法』（定本二五）	

	日本民俗学史	神奈川県の民俗学研究
一三	○全国海村生活調査開始	
一三		●柳田、川崎市登戸のサイト焼きを見学
一五	○柳田、『食物と心臓』・『妹と力』刊行	
一六	○柳田、日本民俗学の建設と普及の功のより第一五回「朝日文化賞」を授賞	
一七	○アチック・ミューゼアム、「日本常民文化研究所」と改称	
一八		○神奈川県郷土研究会、『郷土神奈川』を発刊
		○山川菊栄、『わが住む村』（神奈川県鎌倉郡村岡村・現藤沢市）
昭和二	○柳田、『先祖の話』刊行	
三	○「民俗学研究所」創設	
四	○「民間伝承の会」を「日本民俗学会」と改称。柳田、『北小浦民俗誌』刊行	
		○県立神奈川工業高校に郷土研究部、『郷土研究』発刊
五	○全国離島村落の調査研究開始（三年継続）	
六	○『民俗学辞典』刊行	
		○『津久井郡勢誌』（昭二六）
		●『相模民俗学会』創立、会誌『民俗』刊行
七	○柳田、第一〇回「文化勲章」を授賞	
九	○第一回「稲作史研究会」（成果は『稲の日本史』として刊行）	
		○神奈川県立図書館、『神奈川県の歴史（県下の民俗編　上）』を刊行
三	○「民俗学研究所」解散	
		○『遠藤民俗聞書』刊行
六	○柳田、『海上の道』刊行	
		○神奈川県立図書館、『神奈川県の歴史（県下の民俗編　下）』を刊行
七	○『定本柳田國男集』刊行開始。●柳田國男逝去	
八		○神奈川県立博物館開館
四〇	○『絵巻物による常民生活絵引』刊行開始	
四二		○『日本の民俗　神奈川』刊行
四四	○『日本民俗学会報』第六〇号（方法論特集）	
四七	○大塚民俗学会編『日本民俗事典』刊行	
四九		○『神奈川県史　民俗編』刊行
五〇	●柳田國男生誕百周年記念　○日本民具学会創立	
五二		○『藤沢市史　文化遺産・民俗編』、『茅ヶ崎市史　考古・民俗編』刊行
五四	○坪井洋文、『イモと日本人』刊行	
五五	○『日本民俗学文献総目録』刊行	
五七		○神奈川県立博物館、『神奈川県民民俗分布地図』刊行
五九	○国立歴史民俗博物館開館	

田國男が神奈川県の民俗学研究に影響をあたえたと考えられる要因を、この点に見い出すことができたからである。おそらく内郷村調査は、日本民俗学史上にとって金字塔であることはまぎれもない事実であろうが、それゆえ神奈川県における民俗学史上に及ぼした影響力はきわめて大きかったといえよう。このことは、たんに柳田國男と鈴木重光との出会いという関係の範囲にとどまらず、この二人が神奈川県の民俗学研究の発展に先駆的な役割を果たしてきたことを如実に物語っているといえよう。こうした図式の読み取りを試みるために、表-Ⅱを作成したので参考にしてほしい。

県下における民俗学の歩み

ここで、神奈川県における民俗学研究の足跡を辿ってみることにしよう。このあたりについては、すでに丸山久子によって昭和三〇年代の前半までがまとめられている。(7)

郷土会が実施した内郷村調査が日本民俗学における本格的な共同調査の嚆矢とするならば、さらにこのことは神奈川県下における民俗学研究の嚆矢ともいえる出来事であったといえるだろう。

この調査から、大正一三年（一九二四）、鈴木重光の『相州内郷村話』が刊行され、これが神奈川県における民俗学研究の成果の嚆矢であった。これを境にして、鈴木は、雑誌『郷土研究』、『民俗芸術』、『方言と土俗』等に論文や調査報告を投稿して、県内の民俗学研究の発展に大きな役割を果していくことになる。

昭和のはじめ頃に、尾崎恒雄らが中心になって「横浜民間伝承の会」ができたが、まもなく消滅してしまった。発会式には、柳田國男が「神奈川県と民間伝承」という講演している。

昭和九年（一九三四）、倉田一郎が、「山村調査」で津久井郡青根村を調査したが、その結果は『山村生活の研究』（一九三七）にまとめられている。そのもとは、通称「採集手帖」（自筆ノート）といわれるものであるが、捨象されていない地域社会を捉えるためには、その手帖を原典としなければならない。

昭和一七年（一九四二）、神奈川県郷土研究同盟と神奈川県文化研究会が合併して「神奈川県郷土研究会」が結成され、『郷土神奈川』が発刊された。ここでは、「三浦耳袋」を発表した太刀川健一（総司郎）、長谷川一郎が活躍し、鈴木重光、赤星直忠らも投稿している。

翌一八年（一九四三）には、山川菊栄が『わが住む村』を刊行した。これは、山川が昭和一一年に鎌倉郡村岡村（現・藤沢市）に移り住んだの機会に、柳田國男の示唆を受けながら、この地の変遷をきめ細かに描いた生活史（民俗史）をまとめたものである。

昭和二四年（一九四九）になると、県立神奈川工業高校の郷土研究部で荒井正之が指導のもとに『郷土研究』を発刊している。その特集号として、『足柄上郡三保村民俗誌』（一九四九）、『足柄上郡共和村民俗誌』（一九五七）など、当時としてはすぐれた民俗調査報告を出している。

昭和二八年（一九五三）には、鈴木重光、長谷川一郎らが編纂委員となって活躍した『津久井郡勢誌』が刊行された。

翌二九年（一九五四）に、「相模民俗学会」が創立されて、機関誌『民俗』も創刊された。この会が誕生するによって、県内の民俗学研究者が集う研究組織が本格的に確立されたといえる。相模民俗学会は、同年四月に、和田正洲、丸山久子、小林梅次、中村亮雄、斎藤ミチ子、小森揺子、山崎暁子、安西　勝、小島櫻禮らによって、川崎高校で産声をあげた。[8] これを契機として神奈川県内の研究者が一同に会して、民俗研究の発表機関が県内に確立した。

また、この前後に目ざましい活動をした中村亮雄、小島瓔禮、安西　勝らの存在も忘れてはならないだろう。かれらは、鈴木重光のもとで民俗学に開眼した仲間で、『鮎人』（一九五三―五五）、『ひでばち』（一九五六―六一）という美しい孔版の雑誌を刊行し、やがては相模民俗学会の中枢になっていった。とくに『ひでばち』には、同人のすぐれた調査報告が掲載されている。

昭和三六年（一九六一）、横浜の神奈川県立図書館で講演会が開催され、その内容が『神奈川県の歴史（県下の民俗編）上』（一九六一）、『神奈川県の歴史（県下の民俗編）下』（一九六三）の二冊としてまとめられた。

昭和三七年（一九六二）に、丸山久子・大藤ゆきらによって『遠藤民俗聞書』が刊行された。

昭和四二年（一九六七）になると、横浜に神奈川県立博物館が創設され、その一角には全国に先駆けて民俗展示室がオープンした。

昭和五二年（一九七七）には、『神奈川県史　民俗編』が刊行され、県下全体の民俗がわかるようになった。これより以前に、和田正洲によって『日本の民俗　神奈川』（一九七四）が出されている。さらに昭和五九年（一九八四）には、『神奈川県民俗分布地図』が刊行されて、各民俗の地域的広がりが捉えられるようになってきた。また、近年、各市町村で市史編纂事業が活発で、とくに「民俗編」の刊行が盛んであるが、県下においても『藤沢市史　文化遺産・民俗編』『茅ヶ崎市史　考古・民俗編』を皮切りに刊行が続いている。これによって、県内における民俗事象の仔細がわかるようになってきたので、その成果は今後の研究に大いに寄与するだろう。

○

とりあえず紙幅の関係で、残念ながら神奈川県下における民俗学研究の歩みについては十分に語ることができなかった。また、今回は触れることができなかった県下における民俗学研究の成果とともに、つぎの機会に言及したいと考えている。そして、今回、取り上げた問題についても、いずれ補完したいと考えている。

注

（1）「柳田国男・長谷川一郎・鈴木重光―奥三保内郷村の農村調査―」という論考を発表している。

（2）後藤総一郎　一九七九　「フォークロアへの道」『評伝　柳田国男』日本書籍　一三三～一三九。

（3）八学会というのは、民族、人類、社会、考古、言語、民俗（当時は民間伝承の会）、地理、宗教の八学会で、これらの学会が連合して約二ケ月間対馬を共同調査した。後に心理学会が参加し、九学会となった（牧田茂　一九六九　『生活の古典―民俗学入門―』　角川書店　九五頁）。

（4）一九七九　「【座談会】神奈川県の民俗を語る」『民俗』第一〇〇号

二頁。この座談会の中で、中村亮雄は、当初、『新編相模国風土記稿』などをみて、佐野川村を選び、下調査を試みたが、『新編相模国風土記稿』の記事には作為がみられるので佐野川村から内郷村に決めたということを、鈴木重光がいわれたと述べている。

(5)第一編総説、第二編津久井郡の郡民生活（第一章郡民生活の形、第二章郡民生活の向上）、第三編津久井郡の郡勢（第一章津久井郡の歴史、第二章津久井郡の風土、第三章津久井郡の産業と経済、第四章津久井郡の交通・通信・土木、第五章津久井郡の教育と文化、第六章津久井郡の政治、第七章津久井郡の民生）第四編津久井郡の将来、という構成になっている。さらに郡民生活では、町村の集落、家（住居・食物・衣服、生業、子どもの生活）、風習（信仰、集落行事、婚礼）などを取り上げている。また、津久井郡の歴史の中では、サス畑（焼畑）のこと、風土では、集落構成や動植物のこと、教育と文化では、宗教と民俗という項目を立てて、神社と寺院の一覧、津久井の民俗を取り上げている。

(6)松本三喜夫編　一九九〇　「資料　相州内郷村余聞―柳田国男農村調査のころ―」『府中市郷土の森紀要』第三号　一九～二六

(7)丸山　久子　一九五八　「神奈川県」『日本民俗学大系』第一一巻（地方別調査研究）　平凡社　二八三～二八六頁。

(8)【座談会】神奈川県の民俗を語る」『民俗』第一〇〇号　一九七九　一～九頁。この座談会の出席者は、大藤時彦・小林梅次・中村亮雄・丸山久子・和田正洲、司会は田中宣一・平野文明の各氏で、相模民俗学会発足当時のことや、県下における民俗学研究の諸問題などを語っている。

引用文献

◇大藤　時彦　一九九〇　『日本民俗学史話』　三一書房。

◇小田内通敏　一九二七　『聚落と地理』　古今書院。

◇今　和次郎　一九八九　『日本の民家』　岩波書店　（初出、鈴木書店、一九二二）。

◇鈴木　重光　一九七五　「相州内郷村話」『日本民俗誌体系』第八巻［関東］　角川書店　（初出、郷土研究社、一九二四）。

◇長谷川一郎　一九五六　「内郷村共同調査の思い出」『神奈川縣の民俗―鈴木重光先生古稀記念文集―』　ひでばち民俗談話会。

◇松本三喜夫　一九九〇　「柳田国男・長谷川一郎・鈴木重光―奥三保内郷村の農村調査―」『府中市郷土の森紀要』第三号。

◇宮田　登　一九九〇　『民俗学』　放送大学教育振興会。

◇柳田　國男　一九七〇　『定本柳田國男集（新装版）』第二五巻　筑摩書房　（初出　『郷土誌論』　郷土研究　一九二二）。

◇　―　―　一九七一　『定本柳田國男集（新装版）』別巻三　筑摩書房　（初出　『故郷七十年』　一九五九　のじぎく文庫　この改訂版が所収）。

【参考文献】

◇川添　登　一九八七　『今和次郎―その考現学―』（シリーズ民間日本学者9）　リブロポート。

◇後藤総一郎監修・柳田国男研究会編著　一九八八　『柳田国男伝』　三一書房。

◇関　敬吾　一九五八　「日本民俗学の歴史」『日本民俗学大系』　第二巻（日本民俗学の歴史と課題）、平凡社。

◇牧田　茂編著　一九七九　『評伝　柳田國男』　日本書籍株式会社。

◇三隅治雄・川添　登　一九七八　『早川孝太郎・今和次郎』（日本民俗文化大系7）　講談社。

◇柳田國男　一九七一　『定本柳田國男集（新装版）』別巻第5巻　（総索引・書誌・年譜）　筑摩書房。

◇神奈川県　一九七七　『神奈川県史～各論編5　民俗～』

◇神奈川県教育委員会　一九八一　『神奈川県の道祖神調査報告書』

◇神奈川県立博物館　一九八四　『神奈川県民俗分布地図』

（一九九一・二・一一稿）

資料　神奈川県民俗学関係文献目録Ⅰ

鈴木　通大　編

【凡例】

◇この文献目録は、拙稿「柳田國男と神奈川の民俗学研究Ⅰ」を補完するために作成した。

◇原則として民俗誌および民俗調査報告書が中心であるが、民俗を記述している郷土誌類や民俗学に関係した文献も取り上げた。

◇単行本を対象としているが、一部、雑誌の特集号を取り上げた。

◇文献は、地域毎とし、その中は原則として年代順とした。ただし、シリーズについては、わかるようにまとめて並列した。また、地域の対象が二市町　村に重複している場合は、神奈川県全般で取り上げている。

◇年代には元号を用いた。　大＝大正、昭＝昭和、平＝平成のことである。

◇各文献は編著名、刊行年、書名、発行所の順に記載した。

◇発行所が記されていないものは、編著名と同じである。

◇一部の文献については、内容がわかるように簡単な解題を付けた。

◇本目録の作成にあったては、田中宣一編「参考資料文献（関東地方）」（『日本民俗誌大系』第八巻　角川書店　昭五〇）および拙稿「神奈川県下における民俗調査・研究の現況」（『かながわ文化財』第八〇号　神奈川県文化財協会　昭五九）を参考にした。

〔神奈川県全般〕

・ひでばち民俗談話会　昭三一　『神奈川県の民俗―鈴木重光先生古稀記念文集―』

・神奈川県立図書館　昭三六　『神奈川県の歴史（県下の民俗編　上）』

・〃　昭三八　『神奈川県の歴史（県下の民俗編　下）』

本書は、神奈川県立図書館で開催された県史講座の講演会の要録で、　県内の民俗全般について、各テーマの分野から解説している。

・神奈川県教育委員会　昭四二　『東京内湾漁撈習俗調査報告書』

本書は、川崎市大師河原、横浜市子安、同市柴、横須賀市走水の漁撈習俗および民俗全般にわたる調査報告書である。

・〃　昭四五　『東京外湾漁撈習俗調査報告書』

本書は、横須賀市鴨居、三浦市南下浦町金田の漁撈習俗および民俗全般にわたる調査報告書である。

・〃　昭四六　『相模湾漁撈習俗調査報告書』

本書は、横須賀市佐島、小田原市米神・江の浦、真鶴町真鶴の漁撈習俗および民俗全般にわたる調査報告書である。

・〃　昭四六　『足柄地区民俗資料調査報告書Ⅰ』

・〃　昭四七　『足柄地区民俗資料調査報告書Ⅱ』

・〃　昭四九　『中地区民俗資料調査報告書』

本書は、伊勢原市日向、秦野市八沢、大磯町生沢の民俗全般にわたる調査報告書である。

・神奈川県立博物館　昭四三　『相模川流域の民俗』

・〃　昭四四　『串川・中津川流域の民俗』

・〃　昭四五　『相模川下流域の民俗』

・〃　昭四六　『三浦半島の民俗（Ⅰ）』

・〃　昭四七　『三浦半島の民俗（Ⅱ）』

・〃　昭四八　『県央部の民俗（Ⅰ）―大和・綾瀬地区―』

・〃　昭四九　『県央部の民俗（Ⅱ）―伊勢原地区―』

・〃　昭五〇　『県央部の民俗（Ⅲ）―秦野地区―』

・〃　昭五五　『県西部の民俗（Ⅰ）―湯河原町・真鶴町―』

・〃　昭五七　『県西部の民俗（Ⅱ）―小田原市・南足柄市―』

・〃　昭五八　『県西部の民俗（Ⅲ）―小田原市―』

・〃　昭五九　『足柄の民俗（Ⅰ）―中井町・大井町―』

・〃　昭六〇　『足柄の民俗（Ⅱ）―足柄上郡松田町―』

・〃　昭六一　『足柄の民俗（Ⅲ）―足柄上郡山北町―』

・〃　昭六二　『県北部の民俗（Ⅰ）―津久井郡藤野町―』

・〃　昭六三　『県北部の民俗（Ⅱ）―愛甲郡清川村―』

・〃　平一　『境川流域の民俗』
・〃　平二　『農耕習俗と農具―昼間家日記を中心に―』
　このシリーズは神奈川県立博物館が、開館以来、毎年継続して実施している民俗調査の報告書。
・相模民俗学会　昭四三　『神奈川の民俗』　有隣堂
　本書は、相模民俗学会の機関誌『民俗』に掲載された論文や調査報告のまとめたもの。
・神奈川県史編集室　昭四五　『神奈川県史民俗資料調査報告1』
・〃　昭四七　『神奈川県史民俗資料調査報告2』
・〃　昭四八　『神奈川県史民俗資料調査報告3』
・〃　昭四九　『神奈川県史民俗資料調査報告4』
・〃　昭五〇　『神奈川県史民俗資料調査報告5』
　このシリーズは、県史の民俗編を編集するために県内各地で実施した民俗調査で得た基礎資料の調査報告書。
・神奈川県　昭五二　『神奈川県史―各論編5　民俗―』
・神奈川県教育委員会　昭四八　『神奈川県文化財図鑑―無形文化財・民俗資料編―』
・〃　昭四九　『酒匂川文化財総合調査報告書』
　本書には、ダムに沈む三保村の民俗全般にわたる調査報告と世附の百万遍念仏などの無形民俗文化財の報告も掲載されている。
・〃　昭四九　『神奈川県の民家―足柄地方―』
・〃　昭五六　『神奈川県の道祖神調査報告書』
　本書は、県下の道祖神について悉皆調査した報告で、各市町村毎に道祖神塔の形態・銘文、道祖神祭祀の内容、道祖神信仰などについてまとめられ、巻末に道祖神の代表的な写真が掲載されている。
・神奈川県農業共同組合中央会　昭五五　『写真集　神奈川県農協の三十年』
　本書には昭和二、三〇年代の農村風景、農作業およびクルリ棒、千歯、田舟、鍬、唐箕などの農具の写真が掲載されている。
・神奈川県湘南地区行政センター　昭五六　『表丹沢の森林記念碑と山神講―ふるさとの森を守り育てた先人達の記録と伝承―』
　本書には、秦野市と伊勢原市における山神講が報告されている。
・神奈川県立博物館　昭五九　『神奈川県民俗分布地図』
　本書には、湿田の名称、六日年越、コト八日、砂盛り、カセドリなど、四八枚の分布地図が解説付きで掲載されている。
・安池　正雄　昭三四　『神奈川の民話』　未来社
・川口　謙二　昭三五　『書かれない郷土史―武蔵・相模を中心にして―』　錦正社
・〃　昭三七　『相模国武蔵国土風記』　錦正社
・永田　衡吉　昭四一　『神奈川県民俗芸能誌』　神奈川県教育委員会
・〃　昭四二　『神奈川県民俗芸能誌（続編）』　神奈川県教育委員会
・〃　昭五七　『神奈川県民俗芸能誌（民謡編）』　神奈川県教育委員会
・清水　長明　昭四〇　『相模道祖神図志』　波多野書店
・小島　瓔禮　昭四二　『神奈川県昔話集　1』　神奈川県教育委員会
・〃　昭四三　『神奈川県昔話集　2』　神奈川県教育委員会
・田辺　悟　昭四四　『相州の海士』　神奈川県教育委員会
・小島　瓔禮　昭四五　『神奈川県語り物資料―相模大山縁起（上）―』　神奈川県教育委員会
・〃　昭四六　『神奈川県語り物資料―相模大山縁起（下）―』　神奈川県教育委員会
・和田　正洲　昭四九　『日本の民俗　神奈川』　第一法規
・大谷　忠雄　昭四九　『神奈川の富士講』　神奈川県教育委員会
・田辺　悟　昭五六　『伊豆相模の民具』　慶友社
・小島　瓔禮　昭五六　『武相の昔話集―神奈川―』　岩崎美術社
・松村　雄介　昭五六　『相模の石仏―近世庶民信仰の幻想―』　木耳社
・田辺　悟　昭五〇　『相州の鰹漁』　神奈川県教育委員会
・竹内　理三編　昭和五九　『神奈川県地名大辞典』　角川書店
・鈴木棠三・鈴木良一監修　昭五九　『神奈川県の地名』　平凡社

・中地方事務所編　昭二八　『中郡勢誌』
・津久井郡勢誌編纂委員会編　昭二八　『津久井郡勢誌』

〔横浜市〕

・横浜市教育委員会　昭四七　『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』
・横浜市計画局　昭五〇　『港北ニュータウン地域内歴史民俗調査報告（昭和四九年度）—港北区牛久保町金子入—』
・〃　昭五一　『港北ニュータウン地域内歴史民俗調査報告（昭和五〇年度）—港北区北山田町—』
・〃　昭五二　『港北ニュータウン地域内歴史民俗調査報告（昭和五一年度）—港北区東山田町・南山田町—』
・〃　昭五三　『港北ニュータウン地域内歴史民俗調査報告（昭和五二年度）—港北区茅ヶ崎町—』
・〃　昭五四　『港北ニュータウン地域内歴史民俗調査報告（昭和五三年度）—港北区中川町—』
・〃　昭五五　『港北ニュータウン地域内歴史民俗調査報告（昭和五四年度）—港北区大棚町—』
・〃　昭五六　『港北ニュータウン地域内歴史民俗調査報告（昭和五五年度）—港北区勝田町・牛久保町—』
・横浜市文化財研究調査会　昭五一　『横浜市釜利谷開発地区文化財研究調査報告書　歴史・民俗編』
・港北区役所　昭五一　『港北百話—古老の話から—』
・保土ヶ谷区役所　昭五二　『保土ヶ谷ものがたり』
・磯子区制五〇周年記念事業委員会　昭五三　『磯子の史話』
・郷土戸塚区歴史の会　昭五四　『ふるさと戸塚—体験でつづる明治・大正・昭和—』　戸塚区老人クラブ連合会
・旭区役所　昭五五　『旭区郷土史』
・西区郷土史研究会　昭五六　『グラフィック西—目で見る西区の今昔—』　西区観光協会
・鶴見区役所　昭五七　『鶴見区史—区制施行五〇周年記念—』
・横浜市市民局　昭五七　『横浜の地名』
・神奈川区役所　昭五九　『神奈川区誌—区制五〇周年記念—』
・久良岐の会　昭五九　『海があったころの本牧・根岸』
・中区制五〇周年記念事業実行委員会　昭六〇　『横浜・中区史』
・中区役所　昭六一　『中区わが街—中区地区沿革外史—』
・横浜市教育委員会　昭六〇　『横溝家文化財総合調査報告書—鶴見区獅子ケ谷—』
・緑区史編集委員会　昭六〇　『緑区史　資料編　第1巻』
・〃　昭六一　『緑区史　資料編　第2巻』
・港北区郷土史編さん刊行委員会　昭六一　『港北区史』
・まいおか水と緑の会編　昭六三　『舞岡の民俗—舞岡民俗調査報告書—』
・港北ニュータウン郷土誌編纂委員会　平一　『都筑の民俗—横浜市港北ニュータウン郷土誌—』
・横浜開港資料館編　平二　『彩色アルバム　明治の日本—《横浜写真》の世界—』　有隣堂
・古川　甫編　昭三三　『瀬谷民俗風土記　明治大正の断片』　私家版
・戸倉英太郎　昭五三　『杉山神社考』　緑区郷土史研究会
・富田富士雄・小林照夫編著　平二　『蒼穹の下魚鱗耀きし地—柴漁業協同組合史—』　（清算法人）柴漁業協同組合

本書には、柴の漁業集落、明治前期や「漁業法」制定下の柴村、柴村の青年会、小柴の伝承にまつわる伝承などが掲載されている。

〔川崎市〕

・川崎市教育研究所　昭四三　『郷土学習資料　第1集（民俗資料編・細山地区）』
・〃　昭四六　『郷土学習資料　第2集（民俗資料編・有馬地区）』
・〃　昭四八　『郷土学習資料　第3集（民俗資料編・大師地区）』
・川崎市立稲田図書館　昭四四　『いなだ子ども風土記　その1　農業編』

・〃　昭四五　『いなだ子ども風土記　その2　衣食住編』
・〃　昭四六　『いなだ子ども風土記　その3　年中行事編』
・〃　昭四七　『いなだ子ども風土記　その4　子どもの遊び場』
・川崎市立多摩図書館　昭四八　『いなだ子ども風土記　その5　変りゆく郷土』
・川崎市教育委員会　昭四六　『川崎市最西部地区民俗総合調査報告―片平・栗木・五力田・古沢・黒川―』
・川崎市教育委員会　昭五七　『岡上の民俗』
・〃　昭五八　『大師河原の民俗』
・〃　昭五九　『二子・溝口　宿場の民俗』
・〃　昭六〇　『稲田の民俗―菅・中野島・登戸・宿河原・堰―』
・〃　昭六一　『小倉の民俗―用水に導かれた穀倉地帯―』
・〃　昭六二　『小杉とその周辺の民俗―都市化と民俗―』
・川崎市市民ミュージアム　昭六二　『川崎の職人（その一）』
・〃　平一　『川崎の職人（その二）』
・山口台民俗文化財調査団　昭六二　『山口の民俗―川崎市麻生区上麻生（山口地区）―』
・川崎市博物館資料調査団　昭六三　『川崎の雨乞い』　川崎市市民ミュージアム準備室
・川崎市農耕習俗調査団編　平一　『川崎市民俗文化財調査報告書―麻生区・多摩区の農耕習俗―』　川崎市市民ミュージアム
・大塚　新平　昭四七　『郷土史ゆりが丘』　大塚書店
・角田　益信　昭五四　『川崎の民俗』　私家版
・〃　昭六一　『川崎の古民謡（上）』　私家版
・後藤　淑編著　昭六〇　『川崎市民俗文化財調査報告書―衣・食・住・方言―』　川崎市博物館資料収集委員会

本書には、川崎市民家園所蔵の衣服、多摩区長尾神社オマトの神饌、　盆行事などの調査報告が掲載されている。
・〃　昭六二　『川崎市民俗文化財調査報告書―衣・食・住・家族―』　川崎市博物館資料収集委員会
高津区内における衣服や食習などの調査報告。
・〃　昭六三　『川崎市民俗文化財調査報告書―衣・食・住・家族・方言―』　川崎市博物館資料収集委員会
本書は、川崎市において調査した衣、食、住、家族、方言のまとめで、巻末に川崎市関係民俗目録が付いている。
・田中宣一・鈴木通大・畑聰一郎・山本質素　昭六三　『「町内会」の民俗学的研究―川崎市域の町内会と旧来の住民組織―』　川崎市市民ミュージアム準備室

〔横須賀市〕
・横須賀市博物館　昭五一　『横須賀市博物館研究報告（人文科学）　第一九号（特集／横須賀市長井の民俗）』
・横須賀市衣笠公民館　昭五二　『古老のはなし』
・横須賀市教育委員会　昭六〇　『秋谷・子安地区集落景観調査報告書』
・辻井　善弥編著　昭五五　『ある農漁民の歴史と生活―三浦半島久里浜地区・古老聞き書き―』　三一書房
・田辺　悟・金子和子　昭五九　『三浦半島の一年―祭礼と年中行事―』　暁印書館
・辻井　善弥　昭六二　『三浦半島のまつりとくらし』　神奈川合同出版

〔平塚市〕
・平塚市教育研究所　昭二七　『平塚小誌』
・平塚市教育委員会　昭三三　『大野誌』
・〃　昭四一　『平塚市・須賀の今昔』
・平塚市博物館　昭五二　『家と村―金目川通り北金目村―』

・〃　昭五四　『家と村Ⅱ―平塚市旧広川村―』
・〃　昭五五　『家と村Ⅲ―平塚市旧真田村―』
・平塚市博物館　昭五三　『相模川の魚と漁―相模川流域漁撈習俗調査報告書―』
・〃　昭五四　『平塚市須賀の民俗』
・平塚市　昭五六　『平塚市史民俗調査報告書1―神田・城　島―』
・〃　昭五七　『平塚市史民俗調査報告書2―豊田・岡　崎―』
・〃　昭五八　『平塚市史民俗調査報告書3―土屋・吉　沢―』
・平塚市博物館　昭五九　『平塚市史民俗調査報告書4―金目・金田―』
・〃　昭六一　『平塚市史民俗調査報告書5―旭―』
・〃　昭六二　『平塚市史民俗調査報告書6―大野―』
・〃　昭六三　『平塚市史民俗調査報告書7―平塚（旧市域）―』
・平塚市博物館　昭六〇　『明治三八、九年農具一覧并図解』
・〃　平二　『明治三六年　神奈川県中郡豊田村々是調査書』（『平塚市博物館研究報告　自然と文化』第一三号に所収）

〔鎌倉市〕
・鎌倉市教育委員会　昭四六　『としよりのはなし』
・鎌倉市教育委員会　昭六〇　『鎌倉市文化財総合目録』
　本書には、鎌倉に関する民俗全般が民俗篇として所収されている。
・大藤　ゆき　昭五二　『鎌倉の民俗』　かまくら春秋社

〔藤沢市〕
・藤沢市教育委員会　昭三六　『遠藤民俗聞書』
・藤沢市教育文化研究所　昭四五　『藤沢民俗文化6（特集／江の島民俗調査報告）』
・藤沢市教育文化研究所　昭四八　『稲作慣行調査報告書―石川地区―』
・〃　昭四九　『稲作慣行調査報告書―大庭地区・西俣野―』
・〃　昭四九　『稲作慣行調査報告書―下土棚・長後・今田・高倉―』
・〃　昭五一　『稲作慣行調査報告書―円行・打戻・用田―』
・藤沢市教育文化研究所　昭五五　『遠藤の昔の生活』
・藤沢市　昭五五　『藤沢市史　第7巻　文化財・民俗編』
・山川　菊栄　昭一八　『わが住む村』　三国書房
　本書は、鎌倉郡村岡村（現・藤沢市）について住民である著者が綴った民俗史である。昭和五八年に再版が刊行された。
・清野久雄・土屋秀四郎　昭三六　『江の島民俗誌―伊勢吉漁師聞書―』　神奈川県教育委員会

〔小田原市〕
・田代　亀雄　昭五二　『小田原歳時記・小田原昔話』　名著出版
　本書は、それぞれがすでに昭和一八年、一九年に刊行されている。
・三津木国輝　昭六〇　『小田原の道祖神』　小田原市教育委員会

〔茅ヶ崎市〕
・茅ヶ崎市文化資料館　昭五〇　『道祖神』
・〃　昭五四　『柳島生活誌』
・〃　昭五六　『茅ヶ崎の伝説』
・〃　昭六一　『茅ヶ崎市　職人のわざ（上）』
・〃　昭六二　『茅ヶ崎市　職人のわざ（中）』
・〃　昭六三　『茅ヶ崎市　職人のわざ（下）』
・茅ヶ崎市　昭五五　『茅ヶ崎市史～考古・民俗編～』
・武蔵大学社会人類学研究会　昭五六　『茅ヶ崎市堤の民俗』
・樋田　豊宏編　昭五一　『茅ヶ崎の道祖神』　私家版

〔逗子市〕
・逗子市教育委員会　昭五六　『逗子市文化財調査報告書　第一〇集（民

俗)』
・逗子市　昭六二　『逗子市史　別編Ⅰ　民俗編』

〔相模原市〕
・相模原市教育委員会　昭五三　『石仏調査報告書』
・〃　昭五四　『講及び石仏（庚申塔）調査報告書』
・〃　昭五六　『年中行事調査報告書』
・〃　昭五七　『人生儀礼調査報告書』
・〃　昭五九　『諸職調査報告書』
・〃　昭五九　『地名調査報告書』
・〃　昭六一　『相模原の畑作調査報告書』
・〃　平一　『川漁調査報告書』
・〃　平二　『小祠調査報告書』
・相模原市教育委員会　昭六一　『相模原の民家』
・〃　昭六二　『田名―相模原市村落景観調査報告―』
・〃　昭六三　『当麻―相模原市村落景観調査報告―』
・〃　昭六三　『資料　相模原市の都市化』
・〃　平一　『博物館建設準備だより　100号刊行記念増刊号』（特集・当麻下溝地区土地区画整理地域内共同調査報告）
・〃　平一　『神楽と芝居―相模原及び周辺の神楽師と芸能―』
・〃　平二　『鍬と鍛冶屋』
・〃　平二　『さがみはらの地名―村をつないだ道・坂・川―』
・金井　利平編著　昭五七　『相模原の民俗』　私家版
・井上　正路編著　昭五七　『まっ黒く炒った豆―さがみはらの年中行事―』　つちえの会
・鈴木　真一　昭五七　『相模原民俗誌』　相模原郷土懇話会
・井上　正路　昭六〇　『幾山川―人の一生の節目、折り目―』　相原の歴史をさぐる会

〔三浦市〕
・立教大学博物館研究室　昭四二　『三浦半島南部の生業と民具』
・三浦市教育委員会　昭四七　『城ケ島漁撈習俗調査報告書』
・三浦市教育委員会　昭六〇　『海辺の暮らし―浜諸民俗誌―』
・〃　昭六一　『海辺の暮らし―城ケ島民俗誌―』
・〃　昭六二　『海辺の暮らし―松輪民俗誌―』
・〃　昭六三　『海辺の暮らし―三戸民俗誌―』
・内海　延吉　昭三五　『海鳥のなげき―漁と魚の風土記―』　いさな書房
・赤橋尚太郎（赤星直忠）　昭三九　『三戸のおしょうろう流し』　神奈川県教育委員会
・浜田　勘太　昭三九　『三浦市三戸のお精霊流し』　私家版
・太刀川総司郎　昭四七　『三浦耳袋　1』　神奈川県教育委員会
・〃　昭四八　『三浦耳袋　2』　神奈川県教育委員会

〔秦野市〕
・秦野市　昭五七　『丹沢山麓の講集団』
・〃　昭五九　『漂泊と定住・御師の村』
・〃　昭六〇　『丹沢山麓の村』
・〃　昭六一　『盆地の村』
・秦野市　昭六二　『秦野市史　別巻　民俗編』
・立正大学民俗学研究会　昭五九　『秦野盆地周辺の民俗～秦野市横野宮上・小原～』
・秦野市教育委員会　平一　『秦野の道祖神・庚申塔・地神塔』

〔厚木市〕
・厚木市教育委員会　昭五六　『厚木の民俗Ⅰ（生業1）』
・〃　昭五七　『厚木の民俗Ⅱ（生業2）』
・〃　昭五八　『厚木の民俗Ⅲ（　講　）』

・〃　昭五九　『厚木の民俗Ⅳ（年中行事）』
・〃　昭六一　『厚木の民俗Ⅴ（ことば）』
・〃　平一　『厚木の民俗Ⅵ（衣1）』

〔大和市〕
・大和市教育委員会　昭五六　『上和田・下和田の民俗』
・〃　昭五七　『深見・上草柳・下草柳の民俗』
・〃　昭五八　『下鶴間・福田の民俗』
・〃　昭六〇　『大和市の民俗～総括編～』
・大和市庶務課　昭五七　『大和市の石造物』
・〃　平二　『わたしが知っている郷土　昭和四九年地区別古老座談会記録―下鶴間北部（公所）・南部　上草柳―』

〔海老名市〕
・海老名市教育委員会　昭六三　『海老名の道祖神』

〔座間市〕
・座間市教育委員会　昭四八　『民俗資料調査報告書（1）』
・座間市　昭五四　『座間の語り伝え　交通・交易・住居編』
・〃　昭五五　『座間の語り伝え　食制編』
・〃　昭五五　『座間の語り伝え　年中行事編』
・〃　昭五六　『座間の語り伝え　生業編』
・〃　昭五六　『座間の語り伝え　産育・婚姻編』
・〃　昭五七　『座間の語り伝え　芸能編』
・〃　昭五七　『座間の語り伝え　村制編Ⅰ　村の起こり』
・〃　昭五九　『座間の語り伝え　村制編Ⅱ　村のしくみ』

〔伊勢原市〕
・伊勢原町　昭三三（昭四〇増補版）　『伊勢原町誌』
・伊勢原市教育委員会　昭五五　『道祖神調査報告書（上巻）』
・〃　昭五五　『道祖神調査報告書（下巻）』
・伊勢原市　昭六三　『伊勢原市の民俗―成瀬地区―（伊勢原市史民俗調査報告書1）』
・伊勢原市　平一　『伊勢原市の民俗―伊勢原・岡崎地区―（伊勢原市史民俗調査報告書2）』
・伊勢原市　平二　『伊勢原市の民俗―大山地区―（伊勢原市史民俗調査報告書3）』
・塩川　静　昭四四　『伊勢原町　民俗史話』　伊勢原町教育委員会
・有賀　密夫　平一　『大山門前町の地理的研究』　私家版

〔大磯町〕
・大磯町教育委員会　昭三一　『大磯町文化史』
・大磯町教育委員会　昭五〇　『大磯町生沢地区民俗資料調査報告書』
・〃　昭五四　『大磯町黒岩・西久保・虫窪地区民俗資料調査報告書』
・大磯町教育委員会　昭六二　『むかしがたり』
・中村亮雄・小島瓔禮　昭三九　『大磯の道祖神祭』　神奈川県教育委員会
・福田　八郎　昭四二　『相模民俗史　巻2　漁民生活』　私家版
・〃　昭四三　『相模民俗史　巻3　年中行事・人の一生・運搬具』　私家版

〔二宮町〕
・二宮町教育委員会　昭四七　『二宮町誌』

〔大井町〕
・福武　直　昭四三　『大井町―地域社会の構造と展開―』　地域総合研究所

〔山北町〕

・國學院大学民俗学研究会　昭二七　『民俗採訪（昭二六年度）』
　本書には、足柄上郡三保村（現・山北町）と同郡寄村（現・松田町）　の調査報告が掲載されている。孔版の小冊子である。
・神奈川県立神奈川工業高校郷土研究部　昭三二　『足柄上郡共和村民俗誌』
・東京教育大学民俗学研究会　昭三七　『西丹沢の民俗～足柄上郡共和村～』
・瀬戸　貞夫　昭五二　『西丹沢の民俗Ⅰ（山北町旧三保村）』　神奈川県教育委員会
・〃　昭五三　『西丹沢の民俗Ⅱ（山北町旧三保村）』　神奈川県教育委員会

〔松田町〕
・早稲田大学人類学会　昭四四　『弥勤寺調査報告（松田町寄）』
・松田町教育委員会　昭五七　『松田町の年中行事』

〔箱根町〕
・箱根町立郷土資料館　昭五七　『宮城野地区民俗調査報告』
・〃　昭五七　『仙石原地区民俗調査報告』

〔愛川町〕
・愛川町教育委員会　昭四三　『あいかわの炉辺史話』
・〃　昭五七　『愛川町郷土誌』
・宮家　準編　昭五三　『修験集落八菅山』　愛川町教育委員会

〔城山町〕
・城山町教育委員会　昭五七　『城山町の地名』
・城山町　昭六三　『城山町史4　資料編　民俗』

〔藤野町〕
・藤野町教育委員会　昭五一　『ふじ乃町民俗文化財』第1集（葛原・和田・奥牧野調査）
・〃　昭五二　『ふじ乃町民俗文化財』第2集（甲州街道とその周辺調査）
・〃　平一　『ふじ乃町民俗文化財』第3集（篠原・日連・佐野川西）
・藤野町教育委員会　昭五五　『ふじ乃町の古民家』
・〃　昭五九　『ふじ乃町の職人と諸道具』
・〃　昭六〇　『ふじ乃町の年中行事』

〔清川村〕
・清川村教育委員会　昭五四　『清川村の郷土史』
・〃　昭六〇　『宮ケ瀬の民具』
・〃　昭六三　『清川の伝承』
・清川村老人クラブ連合会　昭五六　『山彦古話』　清川村役場

〔津久井町〕
・津久井町教育委員会　昭六二　『津久井町誌』

〔相模湖町〕
・鈴木　重光　大一三　『相州内郷村話』（昭和四六年に再版）
　本書は、著者の母から聴いた話を中心にまとめている。その内容は内郷村の位置・名称、お日待ち、御師、天狗の話、一つ目小僧、獣の話、鳥の話、虫類の話、植物の話、民間療法、年中行事などである。
・〃　昭三六　『内郷村雑話』
・榎本　政市　昭三九　『千木良の変遷』　相模湖町教育委員会